

伊波小通信3

発行：石嶺 聡 NO.3 令和元年6月9日(日)

子どもを見る目、育てる術すべ

1 できていないことにつけ込む大人から、まずできていることを認める大人へ

子どもを見てみると、「あれもできていない、これもできていない」とイライラしていることがあります。しかし、どの子どもにも、必ずできていることはたくさんあります。とかく私達大人(教師・保護者)は、子どもがげんにできていることはさておいて、できていないこと、つまり、子どもの不十分さにはばかり、あれこれ注意を促しがちになってはいないでしょうか。

子どもは、まず、きちんとできていることはできていることとして認めてほしいのです。そして、それをもとに、できていないことがどうすればできるようになるかの示唆を求めているのです。

「子どもは、元来不十分な存在である。だからこどもなのである」大人として、まずこうした視点に立って、子どもと接していくことが大切なのではないでしょうか。子どもの立場に立ってみると、不十分さにつけ込まれるばかりでは、つい「うるさい」と反発したくなるのも無理はないように思います。

たどえていることが当たり前のことであっても、まず、できていることを認められると、気分も良くなり、できていないことに対する大人の注意にも、素直に耳を傾けてみようという気持ちになるのではないのでしょうか。

2 ロの大きな大人(教師・保護者)から、目や耳の大きな大人へ

とかく大人は、ロが大きすぎるように思います。何もかもきちんとできるように欲張るあまり、あれこれとついロうるさくなってしまいます。これは大人として当たり前のことかもしれません。

しかし、こういうことを続けていると、やがて子どもは、大人を「うざい」存在として受け止め、肝心なことや自分にとって不都合なことを話したくなくなるのです。仮に話そうものなら、大人のロが前よりもおきくなることは目に見えているからなのです。子どもが求めているのは、まず、大人の温かいまなざしに満ちた大きな目と自分の思いを聞いてもらえる大きな耳なのです。そのことが保障されれば、子どもは大人にまどわりつき、すり寄ってくるくらい近い存在になってくるものだと思います。それが、子どもを見る目、育てる術だと私は思うのです。

